婦人と子ども

第四卷第二號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照同は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十七年二月二日印刷
同　年二月五日發行

發行兼編輯者　東京市神田區西小川町一丁目一番地　有久龍一
東京市神田區錦町一丁目十九番地　下主計
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
印刷所　女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會
發行所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂
發賣所　大賣捌所　東京　東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

不許複製

會告

拜啓來二月十三日第二土曜日午後一時三十分女子高等師範學校附屬幼稚園に於て第三十二回常會相開き候間萬障御繰合せ御知友御同伴御出席被下度此段御通知申上候也

追つて當日は演說等の外井口教授の遊戯の實演可有之候

明治三十七年二月五日

フレーベル會

會員御中

婦人と子ども第四卷第二號目次

子ども

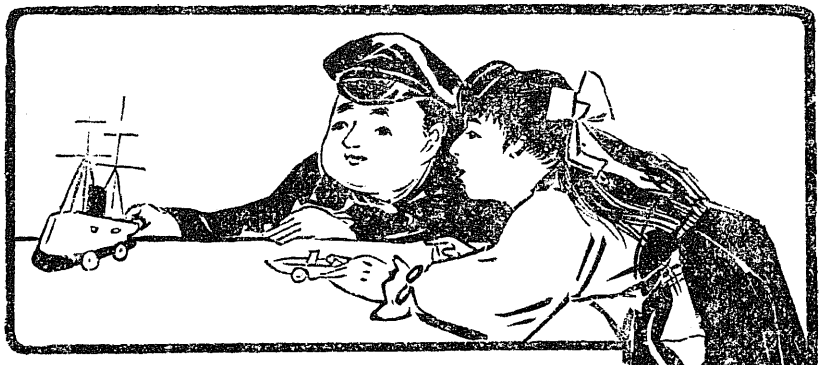
鼹鼠の起源……一
いそっぷ物語……八
爪と鳥……一〇
室内遊び……一一
奇妙な動植物……一三
そろもん王の智惠……一六

婦人と子ども

安井河野二氏を送る……牧羊……一七
安井哲子の君を送る……松村ひさ……一九
懇話會につきて……ふみ子……二一
御製……二七
怒、自愛、嫉妬の情……松本孝次郎……二七
子供のおもちや……ひさ子……三二
乳母を撰ぶ法……久永童山……三五
人の婚姻をいはひまゐらせて……つねを……三七
偉人の學校時代(二)……米溪……三八
割烹十二ヶ月(さざらぎ)……石井泰次郎……四二
庖厨探險……や、て……四六
清少納言……富士の舍……四八
母と幼な子……つねを……五〇
幼稚園案内……東基吉……五〇
幼稚園の遊戯(其二)……松村久子……五三
各地の手鞠歌子守歌……五六
珠鷄の話……久永達倫……五七

雜報

編輯局より●櫻蔭會發會式●敎育青年會の創設●日用惣菜料理部創設●河原操子氏の消息●各國兒童生活博覽會●新刊紹介●會報



婦人と子ども

第四卷第貳號

鼹鼠の起源

やまとの翁

いつの頃でしたか、まづ、ある處に、慾張りの金持老爺さんと正直物の貧乏老爺さんとがありましたとさ。

さて、此二人の老爺さんたちは

一所の畑をお仲間にして、持って居りましたが、或時のこと、丁度同じ時刻に、二人とも、同じ種を持って行って、此畑に播きました。

所が、神樣は、正直老爺さんを惠んで下さいますから、この老爺さんの播いた種は、ずん〳〵芽を出させて呉れましたが、慾張老爺さんの播いた種は、一向に芽を出して來ませんでした。

そこである日の朝、二人揃って畑へやって參りました所で、慾張老爺さんは、「今芽を出して居るのが、自分の播いた種だ、この所は、己の地面なんだもの」といひ出しましたので、正直老爺さんは、吃驚して、「いーや、そんなことはない筈だ、それは私の播いたのに違はありません、」といって爭って見ましたが、

慾張老爺さんは中々承知しません、そして、隨分無理じやありませんか、次の樣にいふのです。

「どーも、然しこう二人で、爭って見ても、つまりは水掛論で切りもない話しじや、で、お前さん、己の言ふことを信じてくれないのなら、まあ仕方がないから、明日の朝早く、夜の明けぬ前に、二人でこゝに來て見よう、すると、神樣が此喧嘩の裁判をして下さるに違ないから、」

そー言はれたもんですから、正直老翁さん、仕方なしに、家に歸って行きますと、慾張老爺さん、一人そこに殘って居って、夜中かゝって、其畑へ深い穴を一つ堀りまして、さて、家に歸って行って、自分の息子を連れて來て申しますには、「お前は、

今から、此穴の中に這入って居て、明日の朝、己が來て、此種は誰が播いたのかといって問ふたらお前は、此穴の中から『そりや　金持老爺さんのだ、貧乏老爺さんのじやない』と言って答へるのだよ」

と言ひ付けまして、上から藁などを一杯冠せかけて　分らない樣にして歸って行きました。さて、翌朝になりますと、二人の老爺さんを始め近所隣りの人さへ、澤山に其畑へやって參りました。すると、金持の慾張り老爺さんは、大勢の中から出て來まして、天にも聞こる樣な大聲を上げて申します、

「神樣！どーかお告げを願ひます、これは私が播いた種でしょーか、夫とも此貧乏老爺さんの播いたのでしょーか。」

大勢の人は、ふだんから、慾張老爺さんのことも、正直老爺さんのことも、よくしって居まして、こんどの事も、どうせ、慾張老爺さんが可けないのだらう、だから、あんなに大聲で祈ったとて、神樣は屹度、正直老爺さんのだといって下さるに違ないと口には出しませんでも、十人が十人まで、皆全じ樣に思って居りますと、意外にも地面の中から聲が聞こえて

「そりや金持老爺さんのだ、金持老爺さんのだ」と言ひましたから、正直老爺さん始め、集まって來た大勢の人も皆吃驚してどうした事かとあきれて居りますと、今度は天の方からまことに清らかな いゝ聲がして

「今の言葉は聞くには及ばん、播いた種は、正直者の貧乏老爺

さんのに違いない」

と言って、夫から、一ゃく　慾張老爺さんのした事を、大勢に言って聞かせられましたので、大勢の人は、あっと言って、今更慾張老爺さんの惡計に驚いて居ります。

そこで、神様は、又、穴の中の息子に向はれまして、

「汝は親の惡事を助けるとは、不届な奴じゃ、其罰として、太陽の空に輝く間は其穴の中を出ること罷りならん」と、言ひ渡されました。

すると、其息子は、其儘其處で、鼹鼠になって仕舞ひました。

鼹鼠が、晝太陽の光を恐れて、地の中へ〳〵と逃げて回はるのは右の譯からだといふ事です。

めでたし〳〵。

いそっぷ物語

其四十六　蛇と人

一匹の毒蛇が、人の家の廊下の下に穴を作つて住んで居ましたが、ある時其穴から、出て來て、其家の子供を嚙み殺しました、兩親は、大層悲みましたが、お父っさんは、よし〳〵夫では一つ敵討に、彼の毒蛇を殺して仕舞はうと考へまして次の日、蛇が食物を求めに、穴から出ようとする處を待ち受けて、大きな手斧を以て、たゞ一討にしてやらうと擲へましたが、殘念なことには、あまり狼狽たために、蛇の首を斬りおとすことが出來ないで、やつと尾の端を一寸斬り落とした丈けで逃がしてやりました。夫からと云ふものは、お父あんは、毒蛇が又自分をも嚙みに來るのでないかと思つて、急に恐くなつて來ましたから、とう〳〵蛇と仲直りをしようと思つて、少し許り御飯と鹽とを持つて行つて、其穴の口にやつて置きました、すると、彼の蛇は、ニューつと、穴から首を出して來て申しまするには、

「ねー、お前さん我とは決して仲直りすることは出來ないじやないか、なぜかといふに、已はお前さんを見る度に、已の尾を斬り落された事を思ひ出すし、お前さんは又、已を見る毎に、息子の事を思ひ出すからだ」

害を與へた人の前で、其害を忘るゝ事は難い

其四十七　牡牛と屠牛者

ある時牡牛どもが、集つて會議をしました。そうして「どうも、彼の屠牛者といふ奴は、常に吾々を殺しに來る憎い奴だから、今度は、此方から彼

等を亡ぼさうではないか」といふ事を相談しました、そして、愈〻其計劃を實行するといふ事に決めて、各自二つの角をとぎすまして居ますと、其中で、一番年とつた牡牛が、皆に申しますには、「なる程、屠牛人が吾等を殺すには違ないが、然し夫にしても中々上手にやつてくれて、決して無駄な苦を吾等にかけないと思ふ、今若し吾々が、彼等を亡ぼして仕舞ふといふと、彼等から殺されることは免れるにしても、其代り今度吾々は、下手な人の手にかゝつて死なねばなるまい、何故かといふに、縱令、國中の屠牛者を殘らず亡ぼして仕舞つた所が、人間といふ者は、其爲に牛肉を食べることを已めないからなあ」

一害を以て他の害に代ふるは愚なり

其四十八　鹽商人と驢馬

鹽商人がある時、驢馬をつれて海濱に鹽を買ひに行きました。所が、其歸り道に谷川があります。其谷川を渡る時に、此の驢馬は、態と足を履み滑らせて忽ち、河の眞中でひつくり返りました。そして起き上つて來た時には、鹽は大方水で溶けて仕舞つて、其爲に大に荷が輕くなりました、商人は、仕方なしに　元の所に引つ返して、も一度鹽を積み直して、さて其谷川の處に來ますと驢馬め、前と全じ目的で以て、又ひつくり返つて起き上る時に、荷物の重さを半分にして仕舞つてそして、丁度目的を遂げた樣な風に、勇ましく、嘶いて居ます、そこで商人は、とうゝ其惡戲を考へついて、三度目に、全じ場所へ取つて返して、今度は、鹽の代はりに、海綿を一杯、驢馬の脊中に積み込んで戻りかけました。さて、谷川まで

來ますと、例の通り驢馬の奴さん、又ひよいと水の中にひつくり返りました、所が、今度は鹽と違つて海綿と來たから堪らない、だん〳〵水が浸み込んで重くなる許り、起き上つて見て、さすがの驢馬も、之には弱り入つて、閉口しましたとさ、

其四十九　病氣の鹿

一匹の鹿が病氣で、森の隅の靜な所に寢て居ますと、大勢仲間の鹿が見舞に來ました、しかし見舞に來たはよいが、病氣の鹿が、食べる爲めに取つて置いた食べ物を、皆で分けて食べて仕舞いました、それがために、此鹿はとう〳〵死んで仕舞つた、病氣の故ではない、食物がなくなつて、

惡友は利益よりも寧ろ害惡を持ち來ること多い

狐と烏

いつも〳〵盜賊猫がやつて來ては、自家の鷄を捕つて行つて仕樣がないから、よし〳〵今に殺してやらうと思つて、牛肉の中に毒を入れて、庭に投げて置きました所が、烏めが、屋根の上から、これは甘いものを見つけたと、喜んでくはへて木の上に飛び上りました、すると、狐が其處へやつて來て、烏め、甘い物を持つて居る、一番だまかして取つてやらうと思つて、極めて丁寧な調子で

狐「これは、神樣の御使烏さん、其後はまことにしばらく

烏「あなたは、私を誰だとお思ひですか

狐「左樣、あなたはあの鷲さんでせう、いつも神樣の所から、お使に來て、私の所へ甘いものを持つて來て下さる……

これを聞いて、烏は、さては狐は己を鷲と間違つ

たと見える、鷲だと思つて、あんなに丁寧にして居るに、ひょつとかして、烏だと知れては、面白くあるまい、これは一番鷲になりすまして、氣前を見せてやらう、併し、夫かといつて、此牛肉をやるのも惜いものだがなど、考へて居ましたが、とう〳〵思ひ切つたと見えて、彼の牛肉を上から投てやつていかにも鷲の樣な風をして、大樣に飛で行ました

狐は、鴉の馬鹿者奴が、甘くおれに欺されて、折角取つた甘い物を呉れたなと、打ち笑ひながら、やがて、むしや〳〵と食べました。

が、食べて仕舞ふか仕舞はない中に、毒が回つて來て、忽ちの中に、悶へ死にをしましたとさ。

室内遊戯

(十)盲人の裁判

一人が目を隠して居ると、殘りの人を一人づゝ誰

かゝ引き連れて、其側に持つて行く、目隱しは、見ないで、手で觸つたり撫でたりして見て、其誰だかを當てるのです、當てられた人は、すぐ代つて目隱しになり、當てなければ、後へ〳〵と違つた人を連れて行くのです。

（十一）英雄の籤抽き

紙の籤を、遊びの人數だけ拵らへて、其籤の端に十とか二十とか二十五とかの數を書き入れて置いて、さて、各自夫を抽き當てたときに、自分の引き當てた數と仝じだけの、昔の英雄の名を言ふのです、始めに籤を抽いた順で以て、言ふことにして前に言つて仕舞つた英雄の名を、次に言ふ人は二度と言つては行かない事になる。

これは、英雄の名でなくても、或は動物の名とか植物の名とかにしても宜しいのです。

十二

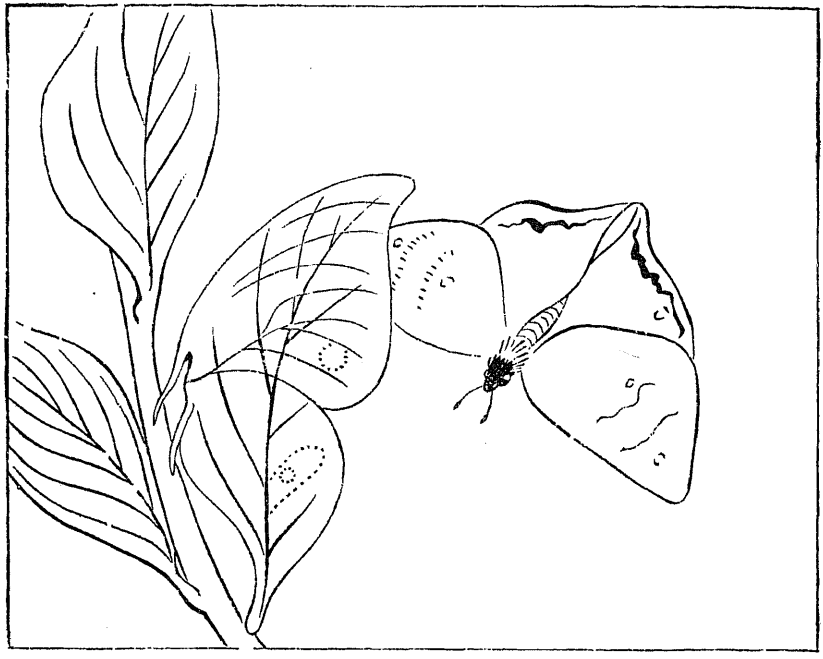
奇妙な動植物（つゞき）

田村寛二

第一回のお話の時に申しました、ベントウコワシがなぜあんな姿勢で樹枝にとまるかと申しますとあれは強い動物に見付けられて食はれない樣に木の枝の眞似をして居るので、動物の擬態であると申しましたが、茲にも其体の彩色と相待つて巧に其擬態をして居る、極面白い例がありますから二つ三つ擧げて見ませう。

（九）木葉蝶

我國の琉球地方やマレイ群島や印度地方に棲んで居る一種の蝶があります。木の葉の蝶と申しまして、圖によつて御覽の通り、其翅の表面は極美麗な彩色を有して居りますが、其裏面は丁度枯れ葉の樣であります。此蝶が止まるときには其翅を



閉ぢて枯れ葉の樣な所を出し、而も枯葉のある木に止まるのが常であります。斯ふ云へば皆さんはそんなら枯葉のある木が無かつたら。此蝶は休まずにいつも飛び廻つて居るのか、殊に印度地方の樣な暑い國では其樹木は常に鬱蒼として茂り、日本の樣に紅葉する樹なんかは見られないではないか、それにどうして蝶がそう甘く枯れ葉のある木ばかりに止まるとが、出來るものか、とお詰りなさるでせう、然し常綠樹であるからと云つて一度出た葉が其樹が枯死するまで、青々としてゐる譯のものでない、松などは常綠であるが其代りに古い葉から漸次に枯れて行くから、何時も枯れ葉が幹に近い方に付いて居ます。

此蝶が止まりますと急度後翅の後端にある短い突起を樹の枝に當てゝ、圖の樣な位置をとります

から、此處が丁度葉の葉柄の樣に見えます。おまけに此點からして黑い線が兩翅の中央を通つてゐまして前肢の端に終つてをります。恰も葉の中肋（主脈）の樣なものでそれからまた小肋（支脈）の樣に枝が出てゐます、頭や觸覺器などは兩翅の間へ隱しまして、少しも外からは見えませぬ、唯足を出して一寸躰軀を支へてゐる計りです、だから一見枯葉と異つたをはありませぬ。翅の色なども赤褐色や薄黃で隈取た樣ですから、色合も枯葉と變りませぬ。其うへ翅には所々に小さな黑い點があります、これは枯葉に生ずる黴菌に擬したるものであります。こんな有樣ですから一度此蝶が枯葉の間に隱れますと、とても見出す事は出來ませぬ。

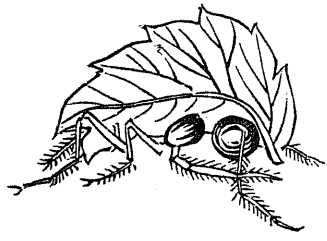
此項の初めに當つて申しました通り、此蝶の表面はまことに美麗で目につき易いですが、それはどんな理由があるのでせうか、裏面と同じ樣な色をしてゐたら一層發見され難いではありませんか、皆さん此理由はお考へなすつて御覽。

（二）木葉虫

木葉虫は蝗虫の一種でありまして、全身は青々としてゐて一寸見た所では綠葉の樣であります、まづ右圖で御覽なさい背にある翅は少しも木の葉と變らない樣な形をしてゐるでせう。其翅の主肋小肋のわり具合、此等の間を網羅してをる細脈の散布し具合など、確かに葉の形をあらはしてをるです。其他六本の歩足も一々葉片の樣な形をしてゐるです。勿論これは前の木葉蝶の樣に此圖で見た所では余りよく似ては居りませぬが綠葉として彩色の具合と云ふものは、中々うまく出來てゐて全く木の葉としか見ゆませぬ。

（一一）　木葉蟻

此も擬態を説明するには、極よい適例であります



して、上圖に示してある通り木葉を荷ふてゐる蟻であります、一寸見ると上部即ち背の處は木の葉ばかりしか見えませぬから、何が見たつて其本体の處はみえませぬ、だからどんな強いものが來ても單に木の葉とのみ思つて、敢て近付きもしませぬ。これが此蟻にとりての城ともなり楯ともなる所のものでありまして、擬態も斯うまで巧みになつて來ますと、實に吾々も其精巧にあきれるより外はありませぬ。

以上述べました二三の例からして皆さんは是等動物が如何に苦心して、此激烈なる生存競爭の行はれてをる世の中に立つて、優者の地位を得ようとしてをるかと云ふことがわかりになつたでせう。斯樣に著しい擬態の方法

を持つて居ない他の動物だつて、此生存競爭の間に處して行くのには皆相當の心配をして、色々と自分の身を全うしようと勉めるものであります。

（未完）

そろもんのちえ

むかし〳〵ユデアといふ國のソロモンと申した王樣は、大層、智慧のあつた方だ相で、そのおはなしが、澤山、書物の中に殘つて居ります。

《その一》

ある日のこと、ソロモン王の所へエジプトの國から、女王がお見えになりました。

此女王は、かね〳〵ソロモンの智慧の勝れて居るといふ評判を聞きまして、どうかなして、一番凹せてやりたいと思つたのでせう、先づ、恭々しく、大王の御機嫌をうかゝつた後、まことに見事な二枝の花を出しまして、「これは、一方は眞の花で、一方は造り花でございますが、大王には、どれがどれだか、お手に取らないで、お分りになる御工夫がございますか」と申し上げました。勿論、其造り花といふのは、大變上手に出來て居るのですから、手に取らないでは、とても分る工風はありませなんだ。すると大王は、徐かに、左右の者に命じて、周圍の窓を開けさせました、所が折しも粉蝶が二三匹飛び込んで來て、眞の花に留りましたから、夫で、譯もなく言ひ當てました。

婦人と子ども

安井河野二氏を送る

本會々員、女子高等師範學校教授安井哲子、東京高等師範學校訓導河野清子の二氏は、暹羅國皇室の招聘に應じ、彼國女子教育の經營に任ぜんがため、去月二十三日を以て、遠く彼國に向つて南航の途に上られた。數多き我が女流教育家の中で、特に、二氏が其選に當られたのは、二氏に取りて最も名譽な事で、はた二氏か此名譽の招聘に應じて、奮然として立たれた勇氣に向つては、吾人は滿腔の敬意を表すると同時に、由來纖弱優柔兎角安逸に耽りて爲すなしとせられた我が國女流の中より、此勇氣ある大膽なる二氏の如きを出すに至つた所の我國氣運の發展を祝せねばならぬ。

思ふに安井哲子氏の才學は、世既に定評あり、女子高等師範學校を卒業して間もなく文部の留學生となり、數年の間英國に遊んで、深く教育學の蘊奥を極められたのは勿論、豐富な思想と、卓絶せる識見と、而して高潔なる品性とは、實に歸朝後三年間煌々として我が女子教育指導の燈明臺となりて光を放たれた所である。蓋し方今我が國女流教育家を以て、自ら任じ人も許せるもの恐らく少くない。然も其學識に於て、はた其品性に於て、氏は確に第一流に推されんければならぬ。河野氏は、晩近の卒業ではあるが、在校中既に活潑敢爲の風あり、將來有爲の器として頗る囑望せられた人で、高等師範學校に訓導となつてからは、嘖々として良教員の名を得た。沈重なる安井氏と、敢爲なる河野氏と、實に二氏の行、よく我國女流の實力眞價を海外に向つて發表する所の代表者としての名譽ある重任を果たし、よく彼國皇室の期望を滿足せしめられる事が出來ると思ふ。

かくて、二氏が孜々として彼國女子教育の經營に任ぜらるゝ曉には、由來蒙昧野蠻、文化の何たるを知らざる此南亞細亞の一國民をして、茲幾數年の後に至り、よく燦然たる文化の光に浴せしめ、彼の國家をしてよく世界の進運に伴ふ國勢の擴張を遂げしむることが出來ると思ふ。茲に至つて、二氏の光榮は、實に世界に向つて誇るに足るべきである、のみならず、尚且外に向つては二氏の經營の成蹟はやがて直ちに彼國をして、否な寧ろ世界列國をして、我國の眞文化――我國女流の實力眞價を認識せしめることゝなり、之に由りて我國勢の膨脹發展に向つて資する所、甚だ大なるものがあらうし、內

に向つては、二氏の大膽勇敢なる遠行は、兎角引き込思案勝ちなる我國一汎の女流を刺戟して、大に進取の氣象を渙發するは勿論、日々機械の如くに同一事を繰り返すの外、安を求め逸に流れ、眼光豆の如く徒に、豆粒大の塲面にのみ跼蹐することを知つて、他に活動の舞臺の無限に開けつゝあるを知らない、言はゞ委靡沈滯せる我國一汎の敎育界を醒覺するには、大に功があることゝ思ふ。

然しながら、成敗もと天に在りで、必らずしも功を一時に期することは出來ない。殊に、氣候炎熱風土甚だ健康に適せざることもあらうし、且つは種々なる人事上の關係の紛糾解き難きものもあらう。成効に急ならんとして反つて敗を見るは、珍らしくない、二氏たるもの幸に自重自愛、徐ろに成効の計を劃せられんことを望むのである。

去月二十三日、吾人が東京灣頭、別離の涙を以て遙に南海に航する二氏を送る時に當り、暹羅灣頭、メナム河に近き磐谷府の一部には、遙に希望の眼を上げて、北方の空を眺めつゝ、二氏の一行を待たれて居るのであらう。

（牧羊）

安井哲子の君を送る

松村ひさ

時將に新春一月二十三日、東の空いまだ白まず、星は鼠色の雲の中に眞珠貝をちりばめたらんやうにきらめき渡れり。全都の家眠り未ださめず、行きかふ人もなき中に、小石川なる砲兵工廠の夜業の物

音のみすさまじくとゞろけるをきゝて、時節柄一種の感にうたれつ。安井哲子女史の今回の行は平和の出陣なりと或人の書かれし事に思ひ合せて、今其君を新橋に送らんといそぐわれは、更に新しく君の壯圖を思ひ前途を思ひ志して行かるゝ運羅を想像し、かにかくとかの君を中心としたる思ひと感想に滿たされぬ。をりしも車四五臺走り來る音後よりきこゆ。もしやとふりかへりすれちがふ一殺那、薄暗き光にすかせば、三臺目のそれはまことや我送らんとする其君なりけり。肌をつんざくばかりの寒風の中を凛として行かるゝ後姿のをゝしさ！いそぎ見送りたるわれはまたもや言ひしらぬ感に打たれぬ。希望の星の無數にかがやける朝の空を、此故國に幾年かの別れを告げ樂しき家庭を後にして出で立たるゝ君の心、今しも新橋にと向はるゝ此今の車上の君の心はいかに、前途に壯大なる企圖と抱負をもちて、万里の波濤を破らんとする其首途にある君の今の心ははたいかに、

かくて幾多の困難にも堪へて其重大なる任務を盡さるべき强固なる意志と明晰なる頭腦を有し、しかも今は無量の感情に滿たされたらん君は、多くの人々に送られて、河野清子の君中島富子の君と共にめでたく出立せられぬ。滊車は三君の行の壯なるがごとくいさましく動き出して走せ去れり。

明治二十三年女子高等師範學校を卒業し、直に其附屬小學校に教鞭を執り、出でゝ盛岡の師範學校に奉職し、再び母校附屬小學校に歸り、明治三十年官命を受けて英國に留學し、三十三年歸朝、爾來女子高等師範學校教授として、孜々として其任務に盡されし君、我日本帝國の女子教育の爲に終始盡瘁

せられし君は、今や暹羅國の招聘に應じ、其皇后陛下の設立にかゝる華族女學校の主任者として、彼國の女子教育の爲に、幾多の抱負を有ちて渡航せられぬ。君は實に女子教育の人なり。敬慕すべき女子教育の献身者なり。

かゝる君をはる〳〵迎へ得たる彼國の幸福は言はでもしるし、思ふに其女子教育に將來大に見るべきものあるべきなり。等しく東洋に國する人が、國をかへて女子教育の爲に盡さるゝ事眞に東洋の爲に賀すべきなり。

風土異なる地に今よりのち幾年を送らるべき君よ。幸に國家の爲に女子教育の爲に自愛せられよ。健全なる身体を以て其企圖を實行せられ、彼國の感謝に送られて、此故國に歸りたまはん日も、われはけさの如く、否今朝の心に成効祝賀の喜を加へてうれしくも君を迎へまゐらせん。

同窓の一人として、其厚誼を辱くしたるわれは、君の新橋に於けるさよならの聲、途上に見たる車上の君の後姿を忘るゝ能はず、即ち一月二十三日の朝、母校の一室に之を記してさらに君を送る。

懇話會につきて

ふみ子

方々の學校や幼稚園では家庭との連絡をはかる爲に懇話會といふことの設けがありまして、時々、家庭の父母なり、兄姉なりを招いて、子供の學んで居る樣子、遊んで居る有樣を御目にかけたり、ま

た子供の教育上のことについて、互に語り互にはかるといふことになつて居る樣でありますが、私共の幼稚園でも春秋の二季に、この催があります。懇話會はずつとせんには父兄懇話會と申しまして大層しかつめらしく父なり兄なりといふ男の方々が御役所にでもお集りになる事の樣な感がありました。

家庭の方でも幾分か左樣の感のあつたものと見えまして誰いふとなく、これにおよびだしといふ極めて冷かな名がついて居りました。けれども懇話會と申すものは元來そんな性質のものでありませんで、其名のごとく打とけて温かに懇話するのが目的でありますから、段々に進んで近來では阿母さん方が喜んでお出かけになる樣であります。ことに近頃は何處の阿母さんでも子女の教育の事には注意して居られますから、成る丈用事を繰り合せて御出席になる樣になりまして、誰もおいでにならぬ家庭といふものは極少數であります。中には「懇話會の日には是非出席しようと思つてたのしんで居りましたがあやにく據ない先約がありまして殘念ながら出席いたしかねますから、代りに本日伺ひました」などいつしやつて前日にお出て下さる方もある位です。斯樣な現象は實に〳〵子供の教育のため喜はしい事で、子供達を世話して居る人も多くの阿母さんの出席をどんなに嬉しく感ずるか知れません、懇話會に出席することは勿論親たる人の義務でありますが、一家といふものは毎日の繁忙の事の外に不意に色々の出來事のあるもので老人がわるいとか、子供が病氣で手が離されぬとか種々のこ

とがあつて、なか〳〵出にくいものであります。其中を務めて御出席下さるのですから私共は之に對して感謝せずには居られません。そして其の感謝の情と共に親子の情について一種の同情が起りますこの同情はやがて保育に莫大の光を添へるのであります。故にたとひ各懇話することが出來なくとも少なからぬ利益はあります。また阿母さん方の方でも自分の子供は幼稚園では如何に遊んで居るか、如何に取扱はれて居るか、友達同志に於て、長上に對してどうであるかといふをなとを御覽になる丈でも良しうございます。まして互に親しく話合をするに至つては相互の爲になることは少くありません。子を知るは親にしかずと申しますから、私共は子供の觀察に付いては阿母さん方から多くの助言を得なければなりません。また子供の家庭に於ける境遇、有樣、教育の方針なといふことも伺はなければなりません。同時に私共も之等に付て、幼稚園に於ける有樣を語らなければなりません。斯樣にして初めて家庭と幼稚園との連絡がつくのであります。先日もさる阿母さんに其の方の子供が幼稚園では衆兒の頭になつて、よく卒ねて遊びなさいますが、どうも誰はいれるのいれぬのと友達の好嫌なさると話しますと、其の阿母さんこれは兼て教育に熱心な阿母さんでありますが、暫く考へられました末やがて、それは斯樣なことが原因であるかも知らんといつて左のことを語られました。

私の家の近處には子供に遊はせたくない卑い子供がありまして、時々誘ひにまいりますから、其時は子供は寢て居るとか何とかいつて返します。

そして後で誰とは遊んでもよいが、あの子供とは遊はれぬといふことをよく云ひ聞かして置きます。また兼てこういふ風にして居ります。

成るほど其阿母さんのいはれる樣に或はこれが友達の好嫌をする原因かもしれません。私はこれを伺ふと同時に先にも同し例のあつたことを思ひ出しました。ほんとに子供はまだ善惡の差別はつきませんから色々の方面に氣を付けて居りませんと時々斯樣な間違はありがちのことであります。私はこの阿母さんのお言葉によつて子供を敎育するには多方面に注意することの必要幷に子供をよい境遇に置くことの大切なことを益々感しました。まだよくわけの分らぬ子供に色々いつて聞かせたり、惡い子供を避けるために子供の前でいつはりをいふよりは、左樣な子供のこない樣に仕向けて置くのがよろしうございます。實に私共は子供に付きて知るに從つて段々進む道にたよりを得て嬉しく思ひます。是等は眞に家庭の賜であります。

けれども、なかには子供の幼稚園での樣子を話して家庭の有樣を伺ひ、そして其取扱方に付いて共に御相談しようなと思つて、或る希望を持つて何か申し出しますと、「いゝえ、私の家では一向左樣のをはありません、よく命を聞きます。」

「いゝえあの子は丈夫でございます。宅の子供の中でも一番壯健でございます。」

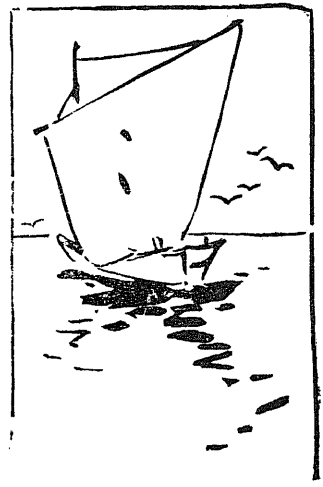
なと答へられることがあります。斯樣な場合は少なからず失望いたします。その子供が家庭でも母の

命を聞かぬことは明かな事實であります。それに阿母さんはそれをおほひかくします。これは勿論子を愛する至情から出たことでありませう。少しでも自分の子供か先生によく思はれよかしといふ、即ち子の幸福を希ふ心から起つたのでありませう、これは實に親心で一寸考へますと無理はありません。しかし、よく考へて見れば決して眞の愛とはいはれません。また永久の愛ではありません。只一時の愛で、しかも愛に溺れて居るのであります。斯樣なことは眞に子供の幸福を願ふ心ある阿母さんの仕方ではありません。申すまでもなく子供のよくない處を無暗に人に知らす必要はありませんから用のない處では語らない方がよろしうございます。けれとも我か愛する子供の教育を托して居る人に對してはかくすべきではありません凡て人の情といふものは互に相知るによつてあつくなるものですから良いことなり、わるいことなり、すつかり打ちあけて語られるに從つて、益々同情が起つて、一層力を盡す樣になるのであります。故に語る方が却て子供の幸福になるので、かくすといふことは大なる相違であります。

また多數の子供を世話して居る人か同し樣な年齡の子供を澤山比へて見て、この子は大分普通の童よりは体力が劣つて居ると思つても、親はこれを丈夫であるといはれます。斯樣な場合には虛弱なのをかくして丈夫であるといはれるのではありませんで親の心には眞に强壯であると思つて居るのであります。それは或は兄弟姉妹か皆虛弱であるに比すれは稍丈夫であるといふこともありませう。しか

し、普通の子供としては弱いのであります。子を知るは親に如かずといふことは動かすべからざることばであります。一方から見ますと親といふものは其子を愛するあまりに他人が觀察するごとく虛心平氣に其子を見ることのしがたいもので、とかく自分の子供はよく思はれ易いものであります。またこれと同じ事で自分の子供のいふ事は何でも事實として直に信ずる傾のあるものであります。處が子供は子供丈の力で理解して語る事でございますから隨分間違のあるものであります。故に今申しました樣な場合には親たる人は少くも他人の言葉をいれて一度は考へて見る丈の覺悟がなければなりません。さうでなければ子女の敎育のため眞實に語り合ふことは出來ません。

私は保姆の側からして家庭の方に對しての望みを申しました。どうか家庭の方々から私共に向つての注意をお示しになることを願ひます。斯樣にして互に改ためてまゐりましたならば懇話會といふものか如何に有益になるでありませう。



題御 巖上松

御製

苔むせる岩根の松のよろつよも
うこきなき世は神そもるらむ

皇后御歌

大内の山の岩根にしけりゆく
こまつの千代もみそなはすらむ

東宮御歌

ふきさわく嵐の山のいはねまつ
うこかぬ千代のいろそしつけき

東宮妃御歌

うこきなくさかゆる御代を岩の上の
松にたとへて誰か仰かぬ

怒、自愛、嫉妬の情

松本孝次郎

恐怖の情につゞき怒の情に付て述べんとす。怒の情は恐怖の情よりもむしろ早く著しく現はる。初は主に自分の食物に對する慾望から生ずるので、即ち其望の滿足されぬ時に起る。時間は永く續かぬけれどもあらはれ方は激烈である。

怒に付て教育上注意すべき事は怒りやすき者を作らぬやうにする事なり。怒り易くなる原因の一つは其子の言ふ事の善し惡しに拘はらず、之を滿足させてある事である。多くの場合に滿足させられると偶遂げられぬ時に怒るのである。

兒童が非常に怒て居る場合には抵抗する勿れ。訓戒する勿れ。訓へても効なし。まづなだめて靜まりし後訓へよ。而して我儘で自己の主張のみとはす者は、幼兒の仲間に入れて幼兒同志の制裁を受けしむるがよろしい。怒る事の不利益なるを說ききかせよ。但し此際勇氣を失はぬやうに注意する事が必要である。

怒と恐怖との情に付て教育上之を利用したるものは賞罰である。幼兒は保護せらるゝ權利あると共に罰せらるべきものである。即ち幼兒が保護の目的に叶はぬ事をする時には大人は之を罰して目的に叶ふ樣にしてやる。即ち幼兒は保護せられ教育せらるゝと共に保護の目的に叶はぬ場合には罰せらるべきものである。

罰は一の非常手段であるからして濫用する勿れ。

罰に種々あり。原因即ち幼兒の過去の行に對する罰として考ふるに、應報的罰賞罪的罰の二として考ふるを得。

應報的罰は幼兒が惡い事をした時には、何時か何處かで不利益が來るものなり。併し打捨ておくとたとひ何時か何處かで其報が來ても、其幼兒は原因結果をさとらず。故に特に其時直に結果を與ふる必要あり。幼兒は之に由て人の行爲の原因結果を知る。故に大人はかゝる罰を課する時に天然に來るべきものを撰むべきである。

償罪的罰の方は自分といふ考がいくらかでき、又少し物のわけが分りかけし頃に用ひてよし。之は罪を償ふ爲にかく〳〵せよと命ずるので、罪の種類に由ては元の通にかへされぬ事がある。此時には外の事をやらせる。凡て罪を犯した場合に落膽せずに善を以て償ふといふ考を起させるのはよろしい。即ち善行に由て惡行の恢復すべきを知らしめるのである。もし自分はとても善い者になられぬと思へば自暴自棄となり宜しくない。惡をつぐなふだけの考をいれてやらねばならぬ。故に罪を後悔して居る場合になほ課する必要があるならば此償罪的罰がよろしい。

次に罰を將來に關係を有つものとして考ふるに威赫的、改善的の二とする事を得。

威赫的罰は恐怖の情に訴ふるので、此種の罰は用ふるを可とする者と否とする者と二說あり。少しは用ひねば訓育はできぬといふ人さへあり。之を用ひてよしといふ人は曰く此類の罰は實際上効果ありと、反對する人曰く効果あるは事實なるも之に伴ふ弊害あり。即ち罰したる人間を永く恨み又は恐るゝ事あり。之は教育上生理上よからぬ事なりと。幼稚園以前又は小學校以前の教育のされ方で、入園後又は入學後威赫に對する感じ大に異なり。少しの威赫をも大に感受する者あり。大抵のものをも感ぜぬ者あり。威赫的罰は實に非常手段中の非常手段なり。此點より言ひて此種の罰は避くべきなり。

改善的罰は幼兒をして、罰せるゝは不愉快なり故に此不快を受けぬやうにせねばならぬと思はして改善に進ましむるものなり。

かく罰には種々ある事なるが何れの場合にても、教育者の眞精神は何處にありといふ事のよく分るやうにすべきなり。但し罰に付ては公平を失ひ易し。之は情狀酌量其他の事がいろ〳〵まじればなり。

兒童が罪を犯した時には次の四ケ條に付て考へてやらねばならぬ。即ち一、無智なるや否即ち惡なりと知るや知らずや。二、過失なるや否。三、惡意ありや否。四、誘導又は强迫を受けし爲になしたるか。

又教育者の側より考ふべきは、一、不注意なりしや。二、誤解なきか否。三、知らず〳〵する事を奬勵したる事なきか否。

右のごとく幼兒、教師の兩側より考へて然る後罰すべきなり。要するに教育者の怒の爲にし又は徒らに恐怖の情に訴ふる罰は無効なり。幼兒と爭ふやうなりてする罰は無効なり。わくまでも教育者被教育者の態度を以てすべきなり。

次は自愛の情に付て

此情は自分の價を認めるを得る頃に起る。故に此情の發達は望あるものなり。但し愛すべき物を愛せしめよ。たとへば家格を愛して威張るなどは誤なり。又自愛の情少なきは自分の價を認めぬなり。自尊の心なきなり。故に幼兒の力にとりてはむしろ容易に過ぐる事をせしめ、而して自信わらしめよ。即ち力のあらはるゝ機會を與へよ。

次には嫉妬の情に付て

此情のあるは教育上見込あり。即ち此心あらば自重心も自愛心もあるなり。而して自愛心の如きは發達させてよき方に導き、利用して奮發心とすべ

し。

他人の物を盗むは嫉妬心の形をかへたるものなり。此心は今困る困らぬに拘らずあるものである。困りて盗む者よりも困らぬに盗む者の方治しがたし。何故ならば之は根本的に惡いので道德欠乏の白痴かも知れず。但し多くの場合は繼父母に育てらるゝとか又は他の家に預けらるゝとか其家嚴格であるとかにて、不自由を感ずる時多き爲に盗むもの多し。又幼兒の仲間に物品を與へて勢力を得る事を覺え、物をほしがり盗む事あり。此物品の贈答は同情を起してよき事なれども度を越えて惡き方に走る事あり注意すべし。

盗む癖を治すに二法あり。一は殘酷に扱ひ苦痛を受くるを恐れさせてやめさせるなり。但し多くの兒は苦み困りて盗むなれば此上に苦を與ふるは宜しからず。大抵の場合には此法宜しからず。今一の法は同情して慰めてやるなり。而して盗む事のできぬ樣にすきまをこしらへぬなり。二年間位此注意必要なり。折角なほりしものを油斷すれば又すきまを見つけ、又再發する事あり。故にすきまなく見張りて、盗むには不利益の伴ふ事、盗まば何時か知れる事を知らせるがよし。又監獄の忌むべき事を圖示でもして知らせ、又はピストルなどを見せて盗賊に對してかゝる武器ありと知らせる事なども効あり。小さい子ならば宗教心に訴ふるがよし。閑居して不善をなすはよくある事故。ひまのなきやうに身体をつかふ仕事を多くせしめるがよし。かやうにして二年位も注意して一方に十分に親切にすればなほるなり。實に嫉妬はよき方に向へば奮發心となり、惡く向へば窃盗などゝい

ふ方に向ふものなり。

子供のおもちや（その一）

ひさ子

私がこゝにおもちやと申しますのは普通一般に所謂おもちやと稱して居りますもの、たとへば、人形とか、デン〳〵太鼓とか、獨樂とか申す物ばかりでなく、主に幼稚園でつかつて居る恩物とか、又草とか、小石とか、土とかの自然物などをも含めて居りますので、つまり人間でもなく犬とか猫とかいふ動物でもなくて、そうして子供の友達になる物子供の玩ぶ物を廣くさして申します。

れもちやと子供は殆ど一日も離れられぬ程親密なものでございます。子供はおもちやなしには暮して行かれませぬ。尤も生れたての兒は全く夢現の境のやうでれもちやも何もいりませぬが、段々心身が發達して參りますと、何でも握りたがる、ねぶりたがる、オシャブリ位は喜んで持つといふ風になり、いよ〳〵おもちやが必要になつて參ります。さて口も相應に廻つて來て、あれがほしい、之がほしいの慾が出る頃になりますと、益々盛におもちやが用ひられます。それからなほ大きくなりますと、叩かれても破られても撫でられても、泣きも笑ひもせぬ、心といふものを有たぬおもちやよりは、心を有て居る遊び友達がほしくなります。そこで犬でも猫でもサツサと友達扱にして遊びます。以上は皆子供自身と同等の物ではございませんが、自然の要求として、人間であつて自分と對等の遊び相手になるもの、即ち子供の友達といふものを求める樣になつて參ります。此友達と

遊ぶ時に當りましても、只人だけを相手にする事もでございますけれども、多くの場合何か物を一緒につかつて遊びます。即ち或物を他と共に玩ぶといふ事が多くあるのでございまして、心身共に故障なく發達しつゝある子供の一日の生活の大部分は之でございます。

此樣に子供とおもちやは離れられぬ關係を有て居りますから、どうか良い子供と遊んで良い感化を受ける樣と願ふがごとく、おもちやといふものに對しても此注意を拂ふといふ事は至當の事でございます。今私は少し細かく分類をして考へて見たいと思ひます。

(一) 自然物

四角に申せば動植鑛物でございますが、動物は玩ぶのではなくて友とすべきもの（子供の友として

の動物に付ては後日別に書いて見たいと存じて居ります）でございますから、まづ子供に玩ばるゝ自然物と申せば植物鑛物でございます。

木も草も何もない土地に子供を遊ばせますと、何をいたしますか。大人ならばさても殺風景な處と思ふでございませうが、子供は忽ちかゝる處にも我友を發見して、小石を拾ひ土をかきよせて遊ぶでございませう。海濱に子供を放ちますと、どんな事をいたしますか。貝を集め砂山を築き海水をひく工夫などを必ずいたします。子供を連れて野原や山道を歩きますと、どっでございませう。アラ花が咲イテマスとか、コンナカワイー草！とか言つては片端から摘みとつたり、又は何といふわけもなく只小さい手にあまるまで摘みためたりするのが普通でございます。こういふ場合に道

草をせぬ子供は殆どございますまい。銀杏や楓の葉がヒラ〳〵と飛び、櫻の花藤の花が散り敷いて居る頃には子供はどういたしますか。必ず熱心に拾ひためて、或は其美を樂み、或は其多きを喜び、或は飯事の材料とするでございませう。

誠に、小石、土、砂、水、草木の葉、花、種などは、何れも子供の喜で玩ぶものでございまして、地球上には、絶えず自然のおもちやが子供に與へられて居るのでございます。木の葉が皿にも舟にもなり、草の葉が多く野菜として用ひられ、花は美はしと樂まるゝ外に御馳走として調理され、木切が庖丁となり、板切、瓦、石などが俎や盆や膳になり、多くもあらぬ水も或は池、川、湖、海などゝ稱せられ、或は酢にも醬油にもなり、砂は築かれて山をも谷をも川をも池をも作り出し、煉瓦は碎かれて砂糖となり、藤蔓は編まれて百足や草履と化するなどの事は、子供を見て居る大人の目に絶えず觸るゝ事柄でございませう。

他の人も言ひ私もそう考へて居る事でございますが、どうも人造物たとへば獨樂とか畫とかいふ玩具はあまり同じ物を續けて永く持つうちには倦きて來るといふ事がございますが、草を摘むとか、土で砂糖屋をするとかいふ樣な事は、決して倦きません。自然物の方が永く子供の注意興味をひく樣に思はれます。之は自然を樂み自然物を愛するといふ事は人間の本能であるといふ處から來るのでございませうか、又自然物には材料の變化が多く且つ子供の力に由りてどうにでもする事のできる爲に自發活働に滿足を與へるといふ事もあると考へます、誠に自然物は結構な良いおもちやでご

ざいます。そうして子供が無心に之を玩んで居る間には、之と親み愛する情も養はれ、其理科的性質、作用も觀察され、發見され、研究され、之を樣々に用ふる事に由て工夫想像の力も練られ感官も習練されます。葉一枚を手にしましても大人は之に由て子供に、色、形、作用などを語る事ができるごとく、子供の時代の理科的知識位は其常に玩んで居る自然物に由て隨分導きつゝ語る事ができると考へます。自然物に由て子供の好奇心求知心を利用しつつ物事を研究するといふ心の萠芽を培養して行くといふ事に大切な事でございます。自然物を玩ぶといふ事は此通り有益な且つ必要な事でございますから「マタ衣服ヤ手ニ土ヲツケテ」とか「コンナ枯葉ヲ澤山持ッテ來テウルサイ」とか、一口にけなす大人がもしありましたならば、それは實に誤つて居ると思ひます。子供が自然物を玩ぶ之に由て遊ぶといふ中には、樣々の尊い良い意味が含まれて居るのでございますから、大人は其つもりで子供に同情してやつて適當な注意を拂ひ指導を與へましたならば、子供にとりて幸福な事でございます。

乳母を撰ぶ法

久永童山

本編は、親友故山本與一郎氏が編著せられた『家庭衛生論』中の一編である、我のみ讀みて、獨り泣くに忍び難いから、之を公にして、『婦人と子供』の愛讀諸賢に示さう。

乳母を撰び方は、隨分やかましきものなるが、規則通り一點の缺け目も無き乳母は、中々得難き

ものにて、強いて之を求めんとすれば、或は小兒を餓えしむるに至らん。

爰には、云ふべくして、行ふべからざる事を省き、予が從來實地に執り來りし方法を述ぶべし、

(一)乳母は年齡二十歲以上、三十歲以下なるべし而して乳母の年齡は、小兒を產し實母と、ほぼ同じからざるべからず、何となれば、年齡異なれば、從つて其乳汁の中にある、營養分異なりて、乳母の乳汁は、小兒に適せざるを以てなり。

(二)乳母は又實母と同年同月に小兒を產みしものに限るなり、乳汁は、小兒生れて後、成長の度に隨て、其濃さ薄さ、及滋養分に差異を生ずるものなればなり、たとへば、乳母は一月に子を產み、實母は三月に子を生みしものとせば、乳母の乳汁と、この乳子を飲ますべき子とが、二ケ月互ひ違ふゆえに、子兒の身體に故障を生ずるに至るなり。

左に掲ぐる表は、產後日數を經るに隨つて、乳汁に差異を生ずる割合を示すものなり。

	分娩後四日目	同上九日目	同上十二日目
水	八七九、八五	八八五、八二	九〇五、八一
固形分	一二、一五	一一四、一八	九四、一九
乾酪質及蛋白質	三五、三三	三六、九一	二九、一一
牛酪	四三、九七	三五、三三	三三、四五
乳糖	四一、一八	四二、九八	三一、五四
無機鹽	二、〇九	一、六九	一、九四

(三)乳母はよく發育し、緊實にして、彈力强く、適宜に乳汁を含み、乳頭は突き出で、凹まず、硬結なく、外傷或は腫物なきを要す。

(四)乳母は、遺傳病あるものは惡し、たとへば乳母に肺病、梅毒、貧血、萎黃病等あれば、其の乳

を飲む子にも此等の病を遺して、大なる害あるべし。（以下次號）

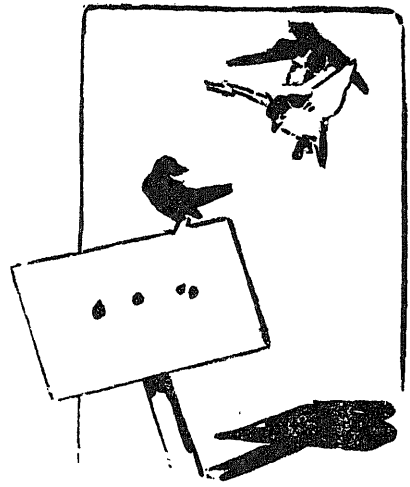
人の婚姻をいはひまゐらせて

つねを

風靜かなる
　あゝこの日がら
嬉しきまとゐの
　また今日の日の
生日足日の
　抑も始めにて
鴛鴦のつばさの
　羽をかさねつゝ
池のみぎはに
　その影うつす

松のみどりの
　色香や深く
家にはにはへる
　花咲きみたし
國には美しき
　實をなし結び
田鶴のことぶき
　龜のよはひの
長く久しく
　尙は幾ひさに
二つのむくろ
　ひとつのまこと
限りもあらせず
　いや榮えなむ

（をはり）



偉人の學校時代(二)

ウエルリントン公　米溪

著名の軍略家、アーサー、ウェレスレーは、紀元千七百六十九年、ダブリンより大約二十哩なる、トリムのダンガン城に於て生まる、而して、此は又、ナポレオン、ボナパート及びキユペーを世に傳達せし年なり。

此の城今は、回錄の災に罹りて、殆んと破壞せるを、公の生れたる室は、其の時迄尙指摘し得べかりき。此の地、ウエルリントン公の名譽を記述せる、ユリンス風の圓柱と、此の英傑の銅像の聳峙せる綠林よりは、僅少の距離に在り。

モーニングトンの伯爵及び其の夫人、乃ち此の、幼アーサーの兩親は、早く、公をトリムの小學校に入學せしめぬ、時に年未た幼なりしか、十歲にして、チエルシアの牧師、ウ非リアム、ゴワアの監督の下に置かれき。

公は虛弱にして、成長するに毫も變化なく、折々の疾病は、倦怠と不注意の狀をなさしむることも屢にて、又時々、重患に陷ることもありしかば其の擧措も、同年の他の兒童と比すべくもあらず。其遊戲場に出入することも極めて、稀にして

偶々室を出て、此の場に入るも、常に外套を纏ひ、場の中央なる大なる、胡桃樹に凭り憩ひて、周圍に戯むる〻學友の狀を注視するのみなるが、若し、其の擧動に不法のことあるや、彼は常に、其の戯の關係者に警告を與ふるを常とせり。而して、反則者の逐はる〻に際しては、アーサーをして、其の缺を補はしめんとは、共に望む所なるを何者も、遂に之を敢てせしむること能はず。若し五六の衆を擁して迫まるに當りては、彼は非常の勇氣と決心を以て戰ひ、其の掌裡を脱せずんは、止まず、而して、一旦奔逸するや、再ひ彼の樹下に歸り、靜かに、平然として、愼重に四邊を眺めしと云ふ。之はチエルシアに在りし時の學友の一人が、一千八百四十年、ブリチッシエ、エンド、フオーレイン、レビウに公にせる所のものなり。

アーサーと其の兄、ウエレスレー侯とは、其の少年時代の大部分は、ノース、ウエルス、ブライキナルトに於て送れり。

一千七百八十一年、父を喪ひ、專ら母の指導の下に在りしか、遂に、イートンの學校に送られたり。然れとも、此の校は、彼をして、後來大に回想せしむべき程の紀念をも止めさりき。

其の校に在るや、傳ふる所によれは、彼は、爽快活潑なる兒童なりしが、時には、躊躇し、沈思することもありきと云ふ。而して、當時其の學友に、ボーブス、スミス（牧師シドチイ、スミスの兄弟）なるもの、性癖怒り易かりしか、後來アーサーの戰て勝を制する毎に、ボーブス乃チ曰く「予は、ウエルリントン公の第一の戰勝者なり。何となれは、或日イートンに於て、アーサー、ウエ

レスレーと予と鬪ふや、彼は痛く予を擊ちたれはなり云々」と。

アーサーのイートンに在るや、其の地最上の旅宿の一なるランガチアン夫人の許に宿せしか、彼の遂に父と呼ばるゝに至れる頃、一日、其の子、ドーア等兄弟を拉して、此の家を訪ひ、寢室より巡覽しつゝ、數々問を發し、降つて厨に至り、遂に彼等に指點せり。

唯見る、厨房の戸に歴然其の名の讀まるゝものあるを。之れ嘗て、其の彫る所なり。

其の此の事あるや、間もなく、此の興味多き記錄は他に移され、旅舍は修繕せられしが、前日訪問せし一人の公は、其の消失によりて、稍憂色あるを見たり。

アーサーのイートンより轉するや、先つブライトンの私立教育所に入りしか、後、佛蘭西に於て嘖々の名ある、アンガーの兵學校に入りぬ、此の校に於て、此の少年學生は、未だ著大なる名聲を殘すに至らさりしか、其の豊富なる蘊蓄をなしたるは、蓋し疑ふべからさるなり。

契約期滿ちて、彼はイングランドに歸りしか、兎も角も之は、モーニングトン夫人の望まさる所にして、殆んど怒りを以て叫ふらく、「妾は妾かの子アーサーが、遂に碌々の兒なるを信ず」と。

斯くて、暫時ありしか、其の長兄は、彼の期待に對して無情ならさりき、如何となれは、吾人は其に付て、トリムの紳士の所有せる、書狀によりて、一の證據を有すれはなり。其の書に徵すれはロード、ウエレスレーが、副將と或利益を以て、其の弟、アーサーを採用せんことを約し、竟に二

ケ年を經過せしか、好機會なかりし爲、履行せられさりしことを表せり。然れとも、竟に、一千七百八十七年五月アーサー、ウエレスレー十七歳を以て、歩兵第七十三聯隊の旗手として採用せられき。アーサー、此に於て、心潛かに建業を期せり其の後ピーアの家に於て人に語りて曰く、「予は其の位地に黽勉にして、以て自から高めたり」と。

公の少年時代の梗概は斯くて將に終らんとす。而して、統轄せる彼の軍務、及び半世紀以上の、其の國に於ける公生涯——軍隊に於けるが如く其の外交官の位地と、會議に於ける——はブリテンの歴史に於て、之と相駢馳すべきもの、果して幾人かある。其の公の文書を關するものは必ずや、教育に於て、公の規事正しく陶冶せられたることの、最も明白なる憑據を認むるを得ん、

蓋し何者も、嘗て、他に之より温和にして明晰なるものあり得べきを知らざるなり。

之等の事實を綜合するに當りて、吾人は此の公より、果して、如何に巨大なる教訓を受くべきか唯之れ、彼か幼時より出精して陶冶せし、習慣の德に歸せすんばあらざるなり。——詳言すれは早き發達と、直截明確なる注意——其の撓まざる勤勉と、無用の言をなさざる沈靜は、遂に此の大器をなせるなり。

又彼の幼時よりの、正確なる習慣は、次の傳說によりて愉快に表明せらる。

ニユー、ロンドン橋の機關師か、翌朝某時に面晤せんとの公の請求を許諾するに當りて、「予は明朝五時に於て、正しく時間を守る樣注意すべし。」と云ふや、公は全く笑を以て答ふらく。「時前十五

分に云へ。予は常に、總て斯くせんと期する毎に時前十五分、必ず之か準備を完成せり。而して、予は兒童の間、之を科業として學べり」と。

公の生涯の無上の原則とせるものは、眞實に對する敬意なり。之は常に、自からこれを賞揚すると共に、熱心に注意せし所にして、又他の者等に認めし所なり。

乃ち知る。吾人の德と稱し、道と呼ぶ所のものに對する最上の服從は、其の實行に在ることを。

割烹十二ヶ月（さざらぎ）

石井泰次郎

二月の料理には、梅花にゆかり有るを以て第一とすべきか、日次記事に當月廿五日の條下（神事）菅神正當忌日云々（上略）號二菜種御供一供物上挿二黃菜花一故云レ爾或依レ歲而菜花未レ開則挿二梅花一と見えたり

◎煮梅の拵方　是は煮梅干と云ふべきを略して煮梅とのみいふなり

梅干の品能き大きなるを撰み（一個の目方五匁余ほど）湯の煮え立かゝれる鍋に入れて、初十五分間湯煮して、其湯をすて、別の湯を鍋に入れて、又十五分間湯煮すべし、かくて又十五分間して、湯をかへ、又十五分間湯煮すべし、以上一時間となるなり、扨湯をすてゝ、別のせともの、器に入れて、酒と砂糖の煮かへしたるをかけて、一夜漬おきて翌日用ふるなり

◎酒一合を鍋に入れて煮かへし、又砂糖をとかしたるを一合（砂糖は百匁を一合の水にて煮とかすなり是とかしたるを一合用ふ）二品を合せて煮立

て丶、梅の上より熱きまゝかけれくべし、一夜經て味よくなるなり

◎梅の取扱は靜にすべし、砂糖にて煮ずして味よく出來る所がつねの煮梅といひて砂糖蜜にて煮る物より、仕方手がるにてよし

◎梅干の量は、五匁程のを十五個にて、酒砂糖右の割合なり、十にても二十位にても、酒砂糖は同位にてよし

◎同、又一法として傳ふる物は、湯煮をせずして梅干を水にて洗ひて二時間ほど水につけ置き、鹽けすけを少し出して、壺に入れて、酒砂糖をかけつけおくといへり、酒の中に砂糖のとかさぬを入れて合せて用ふ、酒の煮かへしの内に砂糖を入る丶加減は酒のねばらぬほどに入る丶といへり

これはあし丶、酒の中に砂糖をすぐ入る丶と砂糖とかしたる物の如く、絹ごしにせざる故ちりなども交らん、又湯煮せぬ梅干の水漬のみなるもいかがあらん、然れども試むるもよからん、實は此方が前の仕方の古法なり

◎梅びしほの拵方　是は梅干醬といふべきを略して梅醬といふなり

仕方の手易きは、梅干の大きなるを、擂盆に入れすこしすりて、たねを箸にて取りすて丶、能々すりて、馬尾篩のうらにのせて、木杓子にて押てこすべし、扨白砂糖のちりを能くさりたるを、かたまりなきやう篩にてふるひたるを少しづゝ入れてすり合をべし

◎梅と砂糖の量は　梅干の肉三十匁に、砂糖を六十匁のわりにてよし、甘きを好まば今少しはましてもよし

◎又色を紅色よくするには　細工紅の生上味といふ品よき紅を以て色をつくべし、あしき紅を用ふべからず、食用紅などいふびんづめ品、或は夫より惡き、雜菓子店にて用ふる品などを用ふる事をいむべし

◎賣店にてうるは色よき物なり、又價やすし、之は色料の品あしきなり、梅びしはのみならず、色ある店棚の漬物などは惡しき染料を用ひたれば用ふる事をいむべし、衛生に害ふはし

◎同　古法には、梅ぼしを水にて洗ひて、鹽のかたまりたる物は、よくあらひ去りて、肉をこそげとり、たねの中に仁を取出して、肉と共にすり合せて、砂糖蜜に古生姜をつけおきたるを細くきざみて、擂盆にてこれも摺置て、梅とまぜてすりて右の蜜漬の汁にて鍋の中にてのばしてつくるなり

◎砂糖蜜は前にいひたるとかしたる砂糖みつなり生姜のつけかたも、能く湯煮して後につくるなり其つけ汁にてもよからんが、梅をのばすには新らしきがよし

◎前の仕方の白砂糖をまぜるを、後の仕方の如く蜜にときてまぜたる方にするがよし、又紅をまぜるには、さまして後にするがよし

◎甘露梅の　拵方　越後新潟より到來せし甘露梅といふ物を試むるに、味と拵方とは古よりの仕方と同し樣なれど、一品たらぬ所あり、そは古き拵方には、青小梅の鹽づけを、打わりてたねを出して其あとへ朝倉山椒あるひは胡椒などを入れ割たる梅を合せて紫蘇の葉にて包み、とあり、今の品の中にて自分の試みたるは梅をぐるりと剝たるを紫蘇にて包みしまでなり、山椒胡椒のつぶ入

ら ず今にても入れたるもあるべし、扨古のは砂糖みつに酒を加へて漬る、夏より冬まで目張しておくべし、又たねをぬかずにするもあれど麁末なりと見えたり、今のも味のつけ方同し事なるべし、中の梅は新潟なるはよし、丸き鹽梅を、ぐるりと剝きたるなり

◎剝き方は　さゝれ梅といふ仕方にするがよし、梅の丸き頭より、末の方へぐる〳〵とむきおとしに、夏の雷干の瓜の如くむくと、元のまゝの丸き形にてたねなき物となるなり、是をさゝれ石の樣なりとて、さゝれ梅とよべり

◎右のむきかたの梅を以て、其中へ、山椒胡椒の粒を入れて、紫蘇の葉の鹽漬にしたるを、湯煮したるにて包みて、後に、砂糖みつと酒の合せ煮たるをかけて漬おきてつくるべし

右のほか梅の香をとめたる物のたくひには、更紗梅あり、梅がえ田夫あり、梅が香あり、梅ざけあり、梅餡かけあり、梅燒あり、梅だひあり、梅麩あり、梅が〻鰹あり、梅が香麩あり、梅干漬方あり、梅花漬あり、其他菓子にも梅が香梅の錦、紅梅香こぼれ梅生梅糖雪中梅寒紅梅冬至梅紅梅餅、紅梅糖あり、あまりの梅の味をのみいへば口のすくなるを覺ゆ、また梅品書名の樣にもならんかとてこゝには其二瓣三瓣のみのやさしさをとむることゝはなしつ

《附錄　料理覺帳》

◎魚鳥料理名詞　なます、すし、かすもみ糟漬はしいを、すはやり楚割、をさし日指類、ひぼしいを、あぶりもの炙物、つゝみやき、いりもの汁煎、ひづ、みなわた、ほししゝしゝびしほ、

あへつくり和物、

庖厨探撿

や、　て、

暑往寒來歲茲に改まり讙話笑語以て新年を迎ふ此の時に際し庖厨の探撿を企つ。或は恐る屠蘇數の子の馳走にありつかんが爲めなりとの疑を受けん事を、されど吾人は鼠にあらず猫にあらず將た犬にあらず、徒らに殘肴を得んとするにあらざるなり、乞ふ心を安んぜられよ。

庖厨に入つて探撿す其の得る所頗る多し、しかも吾人に多大の滿足を與ふるものは肉にあらず酒にあらず將た醬油にあらざるなり、曰く、水瓶曰く擂鉢曰く、擂粉木曰く、吹竹之れなり、此等の數品が其の玄關に於て客間に於て吾人が探り得たる其れとは實に月鼈の差も只ならざるを見るなり。

床の間に飾れるもの壁間に掛けるもの机上に安置せるものを見たる吾人には是にても同じ一家の什器なりや文明の程度に於て數世紀の差違あるにあらずやと、餘りに其の不釣合不調和なるに驚かざるを得ざるなり、しかも吾人は此の不釣合と不調和とに於て探撿の目的を果すを得たりと云ふに至りては是亦一驚を價するものならん。

吾人生來見馴れたる習慣を除き虛心平氣以て此等の什器を觀察せんか。彼の擂粉木の如何に滑稽なる事よ、生へたるまゝの山椒の木其の皮甚だ粗雜なるを只一二尺の長さに切りたるのみ、鑿刀更に加ふるなし、之を彼の膳椀の削り塗り磨きたるに比して其の差は如何。

吹竹の如何に單簡なる事よ。徑一寸長さ一二尺の

竹筒の一端節ありて一小穴を有するのみ、之を同しく風を起すに用ゐらるゝ扇子團扇に比して抑も如何の感かある

更に水瓶擂鉢に至つては如何、粗末の素燒、しかも其の形狀亦頗る奇なり、皿鉢の類の其の形狀に於て彩色に於て大に意匠を凝らせるに比して實に其の差の甚だしきを見る、

此の大なる不調和、大なる不釣合必ずや大に因する所あるべきなり、從つて吾人に何等指示する所あるべきを信ず、抑も古來學者は我が日本民族の由來につきて大に研究し、其の何れより渡來せしやにつきて議論紛々たるを見る。然るに端なくも此庖厨探檢は吾人に對し此の問題に關する材料を附與せらるゝなり、吾人の探檢を企てたるの理由一に此に存す。

由來吾人の事物を分類すること常に其の類似異動の點に於てす、然るに其の表面の形式に於ては常に轉々變化して毫も止まる處なし故に偶ま類似の點を認むるあるも、吾人は容易に之に從ふを得ざるなり、只吾人の從ひ得るは其の裏面の點にあるのみ風俗の如きは殊に著しくして表面は直ちに變化し去るも裏面は容易に變化せざるなり、彼の衣服の如きは上着は種々變化ありと雖も下着下帶の如きに至つては大に之に異なり、又一家屋に在りても玄關の構造と便所の構造の如き現時至る所に此の言を證明して餘りまり、吾人が探檢を玄關客間になさずして庖厨に撰びし所以實に此に存するなり。

日本庖厨の什器が他の什器と非常に不釣合なること前述の如し、而して之を歐米に見るに甚だ趣

きを異にし什器は皆相當の調和をなせるなり。今吾人は一歩を進め此等數品と類似の什器を使用する民族を求むるに甚だ容易にしかも全然同一のものを發見す、即ちマレー群島之れなり。同島に於ては以上數品の外彼の貝扨子の如きも全く同一なり、其他尙下帶の如きも同しく、婦人の齒を染むる如きも相似たるあり。是に於て吾人はマレーと日本との關係を疑はざるを得ざるなり。況んや彼我の間には氣候風あり暖流ありて海の交通自から開かるべき氣運を有するに於てをや。

吾人は地理上に於て將た風俗の上に於て又事實に於て我か日本民族は少くも三種の分子を含むを見る曰くアイヌ等を中心とせる固有民族曰く朝鮮民族曰く馬來民族之なり、されど玆に注意すべきは敢て日本民族は他より移れりと云ふにあらざる事なり、即ち日本民族は日本に發達したるものにして決して他より來りしにあらざるなり。此等の諸民族が日本島なる一つの坩堝の中に入れられて親密に相混和し以て今日に至りたるものなり。

終りに望み一言すべきは維新以來歐米の風習勢を極めて流入し一家に於ても個人に於ても其の影響を蒙むる頗る大なり、從つて庖厨の有樣亦漸次移り行きて遂に其の古風を探知するを得ざるに至らんとす、今日の機變に逸すべからざるなり、願はくは諸姉仔細に之か探檢をせられんことを。

清少納言

ふじのや

今宵の寒さをいかにおくらさせ給ふらんなと、わさときよけに、かきいてたる文を、わなゝき寒か

れる下司をのこにもたせて、むかひにおこしたるいなまんもはいなくてゆきぬ。かとひき入るゝ音すれは、わかき女たち、さなゝり〳〵なとのゝしりいて來、いかなることそあさましうもにきはへるよと、格子引きあけて、今宵はとていれは、よくもこそ渡り給ひつれ、必らずおはすへきとまちもうけたるに、渡り給はぬは、よからぬ事よと一人のいへは、ふくためたるな舞かへし給はゝいとわひしくすさましからんものをなと、けしきはみのゝしりて、母屋にあないしぬ。かるたとるなりけり。あるしの女やかてはこやうのものとうてきて打ちらせは、また見しらぬはおはつかなしやとて、我衣手は露にぬれつるなとよみひかめたりともしらぬけなり。わらはゝえとらねはとて、よみいてたるに、かなたかひして、人々にわらはるれは、弘法にもとてあからめもせす、あなかま〳〵、聞ぬものをとうちみつゝ、わらよくてよとて、やかてそこらのかりいたまさちらしたるに、かなたにては、さゝひかめて、とりわらそひつゝ、袴へかきいるれは、をのことをかしかりて、さしいるゝに、なはやらしとする、かくて度かさなれは男も女も四人なれはとて、二つに分れぬ、一度ならす二度さへまけぬるを、男とても女とても、かはらぬものを、今一度せんにはといふ。さらは、こたひまけたるかたは、いつれにても舞ひいてんといふに、心得て引き爭ふ、女ともやかて衣ぬきてたつものか、あさましくて、みそかにたちいてんとするに、そのまゝおひ來りて、ひきすえぬ。はや何時にや、いみしうさむき事よなと、さすかに人々も心つきて、外の方をみやれは、しらめる

さまなり、一人の女たちて、板戸ひきあくれは、よひのほとよりさえ渡りしもうべ、雪しろうふり積れるなりけり。其女、此内にささきの宮はおはさぬかなとかしこしとも思はぬげに言ひ出てぬ。やかてこうろ峯のとまはに打いていたる、いみしくて、あはれかくまて今の世の女たちの心にかなひてもてはやさるゝを、かのおもとかたましひ、若しきゝたらんには、いかはかりなけくらん、いかはかりうらひらん、けにおもとは、才もなく文字たによめぬ女にはあらさりけるものをとかたはらいたくて

母と幼な子

つねを

すひつもいつか　灰がちに
さひさかこてる　幼な子の

「春着ぬふて」と　何にげなく
優しき言ばに　胸さわぎ
「父がいまさば　いまさば」と
諭せる母を　ながめては
「ちゝはいづこに　ゐ給ふ」と
問ふ子のかしら　掻い撫でゝ
「さればよ汝が　父うへは
かへらぬ旅に　三とせまへ
とのみにまたも　うなだれて
あはれ涙に　母と幼な子

幼稚園案内

（第三卷第十一號の續）

東基吉

保育の方便の續き

保育の方便は、遊戯、唱歌、談話、手技の四項目

に分れて居る。然し前號でも述べた樣に、幼稚園といふ所は、結局遊戯を以て教育する所だといふ事を忘れてはならぬ、子供のどの教育にどういふ功能を得ることが出來るか、其遊戯をどういふ風に指導すれば子供にどんな爲めになるのであらうかといふ事を考へつゝ、子供を遊ばせて行くのである。だからつまり幼稚園の保姆は、子供を遊ばせる役だから何人にでも出來る。然し、眞實に、今いつた樣にして遊ばせる事は、中々考も入るし骨も折れるし、左樣何人にも出來るといふ譯には行かない。大體左樣いふ精神で以て、唱歌も、談話も、手技もやつて行く。だからして、之等の方便もつまりは、遊戯の手段だといつてよい、子供が竹馬に乘つたり、毬を投げたりして遊ぶと仝じ樣に、歌を唱つて遊ぶ、談話を聞いて遊ぶ、手技をして遊ぶといふ風にやらせる、此精神を以てしないと、兎角、いろんな六ケ敷い事になり易い、歌でも大人の讃美歌をすぐもつて來て教へようとしたり、談話でも、やれ修身上の訓誡だの庶物の智識だのと、丸で學校で理科や修身を授ける心得でやりたがつたり、手技にしても、左ながら小學校の手工科の樣な心得でやらせようとする。凡べて、こういふやり方は、子供に課するに勤勞を以てするものであつて、フロエベル氏の意見からいつても、餘程遠くなつて居るといはねばならぬ、小學校の教授は勤勞である、幼稚園の保育はどこまでも遊戯にあるのだ。

時間のこと

我國の規定によると、保育時間は、一日五時間以

内といふことになつて居る。だから、三時間でもよければ、又は二時間でも乃至は一時間やつてもよいのである。然し、まさか、一時間や二時間丈けやるといふ譯には行かないが、大低は五時間とか四時間半とかやつて居る。尤も之は普通の幼稚園のことに付いていふので、彼の勞働者の子供などを預る所の幼兒依託所などに在りては、何れも五時間以上預つてやらねば、其甲斐が少からうと思はれる、次に幼稚園に於ける時間割のことだが、先づ普通は、遊戯、唱歌、談話、手技の四項目によつて、時間割を定めて、通例一項目に凡そ二十分か又は三十分の時間を宛てる。例令ば、朝九時から九時二十分までは遊戯、其次の二十分は談話、次の二十分は又遊戯、次に唱歌といふ樣な風だ。これは適當だらうと思ふ。同一のことを子供に、三十分以上も續けてやらせるのは無理なことで、此時分の子供の心的作用は、其變轉が甚しく注意が始終彼から此へと飛ぶものであるから先づ十五分二十分といふのが至當だと考へる、夫から幼稚園では、小學校の樣に、十分間の休憩時間といふものは置かぬ、否、若し置くとしても、夫は矢張り保育時間だ、休憩時間だからといつて子供等全士はりつ放して置くといふことは幼稚園では出來ない。

が、然し、眞實我輩の考ふる所をいつて見ると、右の樣に、一週間とか一月とかキチンと時間割をきめて置いて、保育にかゝるといふは面白くない、月曜の最初の時間は何、次の時間は何、火曜の最初の時間は何、其次の時間は何と定めて置くと、それは保姆の爲めには少からず便利であらう

然し、子供の活動の狀態といふものは、一週間、一月と全じ樣には留まらない、第一に其日の天氣の具合、次に身體の狀況等で以て、違つて來るは當然といはねばならぬ。だから、或日には、遊戯を三十分以上もして居たい事もあらう、或日には、談話を長く聞いて居て、唱歌などは餘り唱ひたくないといふ事もあらう。否な、日に由りてのみならず、一日の中でも、あれをもそつと長く、これはもそつと少くしたいといふ樣な傾きがある。夫を、何でも乎んでも、時間割をきめて置いて、時間割にこうだから是非とも、こうしなければならぬといふ樣にやるのは、夫は子供の性質に適應しようといふやり振りとはいへない。そこで以て巧妙なる保育者は、よく子供の活動の具合を注意する、そして、其活動の傾向といふものを見て、之に適應して保育して行かうとする從つて、毎日毎週、同一の時間割を繰り返して居る機械的の仕事とは、餘程趣が違ふ。（つゞく）

幼稚園の遊戯（その二）

松村ひさ

（5）遊戯が理想の樣にいつて居る時にはどんな風であるか

といふ事に就て、此書には、子供に向て指導命令する事が少なく、保姆の言ふ口數も少なく、子供にとつては命ぜられて居るといふ感じが少ないのが良いのであると說いて居ります。

保姆の口數が多く指導命令が多ければ多いほど子供は器械的に動く樣になるので、多くを言ひ多く命じなければならぬ樣な遊戯は、何か子供に不適

當な處があるからなので、こういふ風なのを始終して居ると、子供は遊戯の眞の興味を受ける事ができませぬ。一擧手一投足保姆が指圖するといふやうな遊戯がもしございましたならば、それは殆ど死んだ遊戯と申しても宜しいので、よし之程迄でなくとも、之に近い即ち多くの指圖を要するものは、活きた遊戯よりはよほど遠いものであらうと思ひます、又子供の側から申しますと、之は命ぜられたからして居るのであると、もし感じて居りましたならば、そこには苦痛が伴ふとまでは行かずとも、とにかく十分の愉快が伴ひません。こうなると遊戯が一ッの勤勞になり仕事の樣になりまして、遊戯の生命の一半を失ふ事になります。たとへば子供が雀になる遊びをいたしますと、雀になれと命ぜられたから自分は雀になりなければならぬと子供が感ずる樣では、眞に雀らしい雀はできぬので、子供が自分で進んで喜んで雀になつてこそ、其遊びが活きて參ります。とにかく遊戯はどこまでも遊戯であつて仕事ではございませんから、子供は自分で樂んでして居つて命令に由て動いて居るといふ感じが少ないほど遊戯の價が增すのであると考へます。

(6)大人は稍もすると子供を自分の思ふ樣にしたがる傾がある。

それ故に大人は常に、自分は大人の意志で子供を逐ひやつて居るのではないか、果して子供は喜んで導かれて居るのであるか、といふ事を考へねばならぬと說いてあります。

なるほど絕えず大人の意志に由りて動き大人に逐はれて居る子供は丁度御者の鞭のまに〳〵走る馬

の樣なもので、自由意志といふものが發達いたしません、子供には子供だけの人格があり体力があり心力があるのでございますから、遊戯をするにしても之を子供自身につかはせて樂ませて行く事が必要なので、一々大人の方から制肘干渉してあやつゝたり引張りまはしたりする必要は少しもございません。

(7)眞の保姆は子供等と共に子供である。

併し子供等よりは年をとつて居り、子供等よりは賢いものであるとございますが、實に自分も子供になりませんければ眞に子供を知り之をよく教育するといふ事は六かしうございます、或遊戯の時に子供はそれがおもしろい、大人はそんな事は馬鹿らしくておもしろくないといふ風でありましたならば、迚も兩者の精神的融和といふ事は望まれませんから從て眞の教育はできませぬ、義務でおつきあひで、或遊びをするのでなく、保姆自身も子供になつてしまつて共に樂んでこそ其遊戯が活きたものになると考へます。

(8)遊戯には協力といふ事が必要である。

子供が皆で歌つたり演じたりする事が必要である今日頭にならぬ者は明日代つて頭になるといふ風にありたい、又年長者、力の強い者は年少者、力の弱い者の爲に適する樣な遊びを撰んで之等の爲に盡すといふ風でありたい。と說かれて居ります誠に此通りで、遊戯にはぜひとも長幼強弱一致協力して共に圖り共に樂むといふ美風が存しなければなりませぬ。之等の道德的基礎は、子供にとつて極めて價ある事なので、成長後、他と協力する、他の爲に盡すといふ事の土臺となるものでで

ざいまして遊戯の價は大に此邊に存する事と考へます。

各地の手毬歌子守歌

盛岡地方の歌

8 おん白、しろしろ　素木屋のお駒さん、才三さん、煙草の烟は丈八さん一い二う三い四う五う六う七わ八わ九う十を唐から下ッた、お芋屋さん、お芋一升幾らだへ三十二文で御座います、もうちとまかろう、ちやからかぼん、お前の事なら、まけませう、笊お出し、俎、庖丁、出しかけて頭を切られる八ッ頭、尻ぽ切られる唐の芋

9 淀の川瀬の大水車、水の無い年、おいといて、おいとは長崎腰かけて、若し(申しか)若し小供さん此處は何と云ふ所、此處は信濃の善光寺、善光寺様に願かけて、梅と櫻と、あげましよか梅はすいとて、戻されて、櫻は善いとて賞められた一ッちよう〳〵かしました

10 おもさん、おもさん、お嫁入か、およめりなれば、いふて來い、縮の御衣裳は百三十、木綿の御衣裳は百三十、其れほど重ねてやるならば、朝も速うから起きてから、ちやん、ちやん、茶碗に湯を沸し窓の明りで髪結うて、ほろり、ほろりと、おきアえるは、私の弟の千松は金堀山に追ひやられ、一年たちても狀は來ぬ、二年立つても狀は來ぬ、三年ぶりで狀が來て、お虎をよこせと、書いてある、お虎はやらぬが、わしが行く、私が行つたら何くれる金襴、緞子の夜着、蒲團、鳥渡一ッちよう貸しました

11 受取ッた、受取つて、何方様から受取つた、わ

れわれ向ふの屋敷の白壁造の格子作の竹の暖簾のお嬢子さんから受取つた、し、し、しつかりお渡し申しませう

12 あかゞのせい、あかゞのせい、あかゞお初子、お猫子、誑して、お茶碗ぶつかして、買うに買はれぬ、接ぐにつがれず、一もんめ、られられ一もんめ、三本柳さ、雀あ、巣をくつて、落ちてお鷹にさあられた、おやなあ、おやなあ

珠鷄の話

（第三卷第十一號の續き）

久永達倫

珠鷄の卵は、小さくて、殼が厚いから利益が少ないなどいふ人があるが、決してそうでは無い一個の重量十一二匁は大丈夫ある、そして前にもいふた通り、殼が厚いから產卵の時などは、取扱上大に便利である。

彼は活潑敏捷健歩と云ふてよかろう、そして他の鷄のように、草根樹株を堀りちらす事が無いから、作物を害するなどゝ云ふことが無くて安心である。

飼料は、蝦蟇バッタを始めとして、その他蟲の類を喙食するが、冬期は米とか麥であるが、一番好むのは、粟と稗である、又副食として、石炭、貝がら等を給與するがよいのである。

肉質は先づ、雉子（日本產の）と、大同小異、淡泊香味柔軟と云ふて宜からう。

終に臨んで、記者は、本會々員諸君に感謝しなければならないのは、本稿の延載になつた事である、これは全く、記者の病氣であつた爲なので、不得止次第なのである、何卒會員諸君之を諒せられよ。

●正誤　前回の本題歐文中Suinia　Guiniaの誤につき茲に正誤す

雜報

編輯局より

▲拜啓　此正月例に由り各地の愛姉各位より年始の賀狀頂戴、難有一々拜誦致し候。

▲さても、本年は例年になき寒さ、當地に於ては寒暖計、室内に於て四十度以下に降り候。之につけても、日本流の家の立て方は、何某の坊さんの言葉の通り、夏を旨として立てられ候ものか、寒さに弱き我々には頓と閉口の外なく、何とか一工夫致したき事に候。餘談はさて置き、近年稀なる嚴寒とて、東京市の小學校に於ては、朝早くより通學せしむることは、兒童の氣管を侵さしむる恐ありとて、登校時間を十時と致されし由、尤もの注意と存じ候。

▲安井哲子氏、河野清子氏等の一行は愈々去月二十三日新橋發、暹羅國へと押し渡り申し候。先きには河原女史の蒙古王の家庭教師となられるあり。元來西洋婦人などには、宗教のため、一身を挺して異鄉に入り健氣の働きせらるゝは、珍らしき事には無之候へども、日本婦人として、教育のため、海外殊に未開の域に進入するは、實に今回此人々を始めと申すべく、我國機運の漸く、かゝる方面に向つて、世界的に發展し來りたる兆として、深く慶賀致し候。

▲序に御斷はり至し候。かねて、安井氏の「教育と家庭生活」と題する一篇、本號に掲載可致豫告致し置き候處、渡航の日迫りて何分にも、執筆の遑なければとて、是非なく掲載するを得ず其代り

に、航海中、感ずるふしぶしを記して、是非とも寄贈すべければ、宜しく皆様に御斷はりくだされたしとの事に候。

▲昨年十二月以來、天氣は日々快晴のみうち續き候へども、何處やらの天の一方には、時ならぬ暗膽たる黑雲一朶、蟠りて解けざるものありとかにて、例の愛國婦人會など、花々しく活動し始め候由相傳へ申候。然る處、口善惡なき京童の中にはやがて、白鉢卷に長刀的の婦人の活動、文明の今日に似合はしからぬなど評したるものあるやに承はり候。

▲女子高等師範學校卒業生の團體として新に櫻蔭會は起り候。發會式の景況は別項御參照下され度候。女子教育の範圍には、研究解釋すべき諸種の問題尙甚だ多々、もとより女子教育のことだから女子のみにて研究するといふことは出來申さず候へども、然も、かゝる有力なる會の組織せられたるは、確に女子教育に取りて、偉大なる援助と相なり可申候。

▲暹羅國留學女生徒四名は、爾來頗る勤勉、學業の進歩甚だ見るべきものある由に候が、今回更に東京女子職業學校に入學致し候由。

▲女子高等師範學校四年生徒は例年の通り、學校參觀旅行として先月中、文科は水戸地方へ、理科は　地方へ、而して技藝科は前橋地方へ、夫れぞれまかり越し候。

▲此書狀認め終らんと致し候折柄、新聞紙は次の如く報じ候。和歌山高等女學校四年級生徒某、全校生徒の總代として上京し、文部大臣に面會し

て前校長の免職につき陳情する所あり、意志を貫徹せずんば盟つて歸縣せずと大々的氣焔を吐き候由、嘘か眞か分らず候へども、若し眞ならんには全校生徒の從來の養成ぶりこそ、中々手嚴しかつたものと覺え候。

早々

◉櫻蔭會發會式

女子高等師範學校卒業生は從來高等師範學校卒業生（男子）と共に茗溪會を組織し居りしが昨年中右茗溪會に於て男女分離說起り種々調査の末いよいよ分離に決し昨年末に至りて悉皆其手續を了し新に櫻蔭會を組織せり。即ち女子高等師範學校同窓會として會員相互の親睦を圖り併せて教育上の事項を研究する目的を以て前途に洋々たる希望を載せて櫻蔭會は世に生れぬ。時將に新春一月十七日午前十時女子高等師範學校講堂に於て客員會員凡て百五十餘名列席の上めでたく其發會式は擧行せられぬ。まづ同會主事佐方鎭子氏は茗溪會より分離したる事に付て前後の經過、櫻蔭會の成立等の報告、及會の將來に於ける希望抱負を述べ、次で客員町田則文氏中川謙二郎氏の祝辭並に會に對する希望を演說せらるゝあり。之にて發會の式終り次は食堂に入りて新年會、並に會員安井哲子河野清子二氏の暹羅行送別會に女子高等師範學校職員の安井教授送別會を兼て開會、町田同校教授の安井氏を送る辭、櫻蔭會主事吉村ちづ子氏の安井河野二氏を送る辭、二氏の挨拶あり。櫻蔭會は二氏の首途を祝して花環を贈り、終つて一同食事、新舊百數十の卒業生は母校職員と共に喜色滿面和氣靄然として發會を喜び新年を賀し二氏の行の壯を

祝しぬ。次に少時休憩の後、餘興として眞龍齋貞水の講談ありて午後四時閉會、朝來此一日を母校内に暮し客員なる舊師に面し、なつかしき舊友と一堂に會して誰も彼も皆昔に歸りし百餘の人々は喜悅に滿ちて母校を後にし各自其家路に向ひぬ。吾人は此會の將來健全に發達して大に女子教育に貢献せられん事を切望し且つ確信する者なり。

教育青年會の設立

教育實驗界記者渡邊英一、教授指針記者佐藤政治郎二氏、現下我國の教育界に付きて慨する所あり奮然立ちて、教育青年會を設立し、去月其趣意書を發表したり、其綱領とする所、曰く、

一社會の公道を明にし、教育の權威を確立せんことを期す。

一發達の眞義に據り教育の功用を充實せしめんことを期す。

●日用惣菜料理部創設　割烹學科の社會一般の實用に適する物は只一の惣菜料理法あるのみとは吾人の常に信ずる所なるが、日常惣菜料理の教授法は却て高等料理以上の手腕を有する者ならでは教授なしがたきを以て、初學教授者の其教授法をはどこしがたき所にして本科習學者の甚だ遺憾とせる所なりしに、石井式割烹教場に於て、多く此點に注意して是が教授法の順序を研究しつゝありしが、今回特に日用惣菜料理部を開設せられたりと斯道習學者の便益是より多々ならん。

●河原操女の便り　南清の支那人教育に膺れる河原操女史が蒙古王の招聘に應じ、今蒙古内地深く足を進めて王族の教鞭を執れることは、先きに

報ずる所なりしが、最近同女史より天津知人の許に來音ありし一節を聞くに、豫想よりは寒列身を刺して起居に難じ、且つ蒙古流の飲食に困り、食膳箸の就くべきものなし、目下學堂に集め居れる王族の子弟は二十三人にして芝蘭堂に滿ち、薫陶彼の意に愜ひ、指導の進歩驚くべき者ありと申越たりと。（讀賣新聞）

●萬國兒童生活博覽會　未だ曾て催されたる事なき萬國兒童博覽會は舊臘十二日露都聖彼得堡のタウライド宮に於て其開館式を擧げ國務大臣、陸海軍武官、各高等官及び列國外交官等臨席して頗ぶる盛會を極めたり同博覽會には殆んど世界各國より出陳せられしが露國の出品其大部を占め米國の出品最も少なかりき、此博覽會の特色は兒童の衛生及び生理上の發達を一目の下に瞭然たらしむる點にありて、小兒誕生の注意、育兒法の標本玩具の意匠及び小兒教育法等は最も興味に富む者なり、大出品物には學校及び遊戯場の標本あり、或室には圖書を以て兒童の生活を描きたる者あり歴史的に兒童の勇者の生活を描ける者あり又兒童に就ての種々の發見及び人類學上より觀たる各國兒童の物質を區別したる者あり開館式に當り米國費府ブラウムバウフ教授は米國兒童の事を記せる一書を露國太后に贈呈したり、此博覽會の開期は二ケ月間なりと云ふ。

新刊紹介

●女子の心得　下田歌子著

女子自修文庫の第一編として現はれたもので上編心のとゝのへと行爲と（正實、仁慈、恭謙、貞肅、快潤、勤儉、堅忍、沈着、高潔

優雅なるべきこと）下編形のとゝなへと動作と（座作進退、物品薦撤、對話、訪問、接待、贈與品、吉凶、食禮、禮服）といふ風に心と形に關する女子の心得べき事か言文一致で極解り易く親切に說かれてある。上編には古今東西の賢婦人の例が澤山擧げられ、下編には極めて實用的の日常の事迄指示されて居る。凡て此類の修身書作法書といふものはとかく乾燥無味に陷り易いので殊に作法の如きは稀にしかない樣家事に付ての事が無暗と七六かしく並べられ却て日常の事に疎いといふ傾のあるのが多いが本書は慥に此邊から考へて立ち勝つた處がある。なるほど著者が緒言中に「此書は極つた修身書でも規則だつた作法書でもない云々」と斷られた通りで自修文庫の名にかなふ良書である。但し上編に掲げられた樣目が之で完全であるかどうかは六かしい問題であるから敢て爰に論じない（定價四十錢富山房發行）

會報

入會

岡山市石關町一三九角南邦太郎　　青井嘉市
女子高等師範學校　　右田邊春紹介
　　高田ます
京橋區本湊町一六鐵砲洲小學校　　右安東てい紹介
　　河村巳一郎
　　右千葉秀紹介
女子高等師範學校　　右安東てい紹介
　　岩瀨かよ
愛知縣知多郡半田尋常高等小學校　　日比恪
名古屋市立高等女學校附屬幼稚園　　千賀ちえ
　　遠藤しづ
　　山田しう
佐賀縣立高等女學校　　右坪內きく紹介
　　南星かす
麴町區四番町三輪田女學校　　右阿部つる紹介
　　關泰子
小倉市室町尋常小學校　　右中村五六紹介
　　山村助太郎
仙台市大佛前町二八　　立花せん
市ヶ谷佐土原町一ノ二久米方　　森本たみ
沖繩縣師範學校　　右野崎しも紹介
　　壹岐志計
女子高等師範學校　　右松村久紹介
仝　　赤間よね
　　森岡たか
仝　　立野たかえ
大分縣立高等女學校　　右安東てい紹介
　　廣瀨敏子
臺灣臺南內宮後街　　右岡田折枝紹介
　　小松すほ

右　福本とみ紹介　清水常次郎

大阪北區中ノ島三丁目朝日新聞社　原見幸

女子高等師範學校　宮地ますほ

山本つる

右　根來まさ衛紹介

轉居

小石川區表町一〇九へ　永地待枝

岐阜縣岐阜市立高等女學校へ　平野蝶

淺草區新片町三へ　武田まつ

神田猿樂町三ノ三へ　吉澤幸

牛込市ヶ谷田町三ノ一九江藤三保方　清水富久

麻布區霞町一八へ　北野晴

名古屋市內下俵町三ノ甲十九ミストレント內へ　廣瀨鎭

麻布區宮村町七　鵬屋なほ

麴町區下六番町四八淺田德則方　淺田つる

麴町區一番町三七へ　吉田しう

麴町區下二番町二へ　四川みね

神奈川縣三浦郡豐島町中里二四〇へ　佐藤壽鍾

荏原郡入新井村新井宿一四八七へ　中松秀

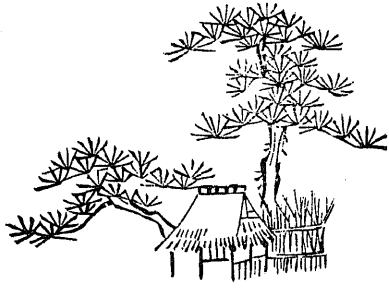
石川縣金澤鐵道官舍へ　村田米

埼玉縣熊谷錄倉町三一六　清水きよ

自明治三十七年一月八日至明治三十七年一月廿三日會費領收

一二〇	三七、一—三七、一二	下條ますみ
一一〇	三七、七—三八、五	桑原いは代
一三二	三七、一—三八、一	小笠原しげ代
六〇	三七、一—三七、六	鈴木れい
一〇〇	三五、九—三六、六	鳥海じゆん
一二〇	三六、四—三七、三	大岩のぶ
四〇	三六、一〇—三七、一	鹽谷ょう
四〇	三六、九—三六、一二	矢野ふさよ
六〇	三六、一〇—三七、三	司馬のぶ
二〇	三七、一—三七、二	安東てい
一〇	三七、一	木村とらゑ
三〇	三七、一—三七、三	根來まきえ
一〇	三七、一	藤岡とき
一〇	三七、一	內田たね
一〇	三七、一	岩田ゆき
一〇	三七、一	益田一枝
一〇	三七、一	平川よし
一〇	三七、一	加藤きつ
一〇	三七、一	藤谷いわ
一〇	三七、一	安藤さだ

柏木ふさ　一〇　三七、一
船木やすえ　一〇　三七、一
村田きぬ　一〇　三七、一
高田ます　一〇　三七、一
岩瀬かよ　一〇　三七、一
森岡たか　二〇　三七、一―三七、二
立野たがえ　一〇　三七、一
厚見幸　一〇　三七、一
山本つる　一二〇　三七、一―三七、一二
村田米子　一〇〇　三六、一〇―二七、七
白樫よしの　六〇　三六、一一―三七、四
田井まつ　一二〇　三六、一〇―三七、九
倉田やす　五〇　三六、八―三六、一二
儀俄ふみ　一三〇　三六、一二―三七、一二
河部好　五〇　三七、一―三七、五
西川みね　一二〇　三六、五―三七、四
小林ふぢ　一二〇　三六、八―三七、七
福本とみ　五〇　三六、一二―三七、四
和知てる　一五〇　三七、一―三八、三
清水常太郎　一〇〇　三六、一二―三七、九
八坂さだ　六〇　三七、二―三七、七
馬詰武　六〇　三六、八―三七、一
三隅とも　一二〇　三七、一―三七、一二
小松すほ　一〇〇　三六、一〇―三七、七
平沼みか　一〇〇　三六、八―三七、五
小島たつ



女子高等師範學校教授　東　基吉君著

幼稚園保育法

定價　七拾錢
郵税　六　錢

フロエベル氏肖像及手技彩色圖形入り製本美麗

幼稚園教育のこと近來漸く盛なるに至りたりといへども悲しいかな之が原理方法等につきて詳細に記述したる書籍なきを以て日々斯業に從事せる保育者其人に於ても更に進んで研究發明の參考に資するものなく殊に新に斯道に從事せんと欲する人に於ては遂に以て保育の何たるを知るに由なく爲めに百事日新の時に當り幼稚園のみ遲々として獨り舊觀を改めざるが如き有樣なるは實に我國教育界の一大恨事といふべきなり。

本書は著者が多年實際につきて研究推敲せられたる結果になりたるものにして先づ筆を一般教育より起して家庭教育學校教育を詳述し次いで幼稚園の必要保育の要旨保育の事項方法等其他一切幼稚園に關する實際の事項は勿論フロエベルの傳記學說等に至るまで一々明瞭に記述して餘す所なく殊に附錄として幼稚園の設備をも添えたれば何人も本書に由りて幼稚園の原理と實際とに通ずるを得べく幼稚園保育者は勿論小學校教師幷びに特に家庭の教育に心を用ゐらるゝ人々に取りては必讀無二の良書といふべし。乞ふ續々御注文の榮を賜はらんことを

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地　目黑書店

御注文の節は本誌廣告御覽の旨御附記を乞ふ

女子高等師範學校教授 關根正直先生校閲 前女子高等師範學校講師 友田宜剛先生編述

女學校用 作文教科書

第一卷（再版）定價廿錢 郵税四錢
第三卷（再版）定價卅錢 郵税六錢
第二卷（再版）定價廿五錢 郵税四錢
第四卷（再版）定價卅五錢 郵税六錢

（文部省檢定出願中）
和裝美本全四冊
全部完成
高等女學校作文教授細目希望者に遞送料二錢にて進呈す

本書は著者が前に女子高等師範學校奉職中の經驗と研鑽とにより成り殊に同校國語主任教授關根先生の意見をも加へ秩序を整へ難易の度をはかり文の分解結合、語句の斷續段落より、句讀點、送假名、文字の誤り、事實取捨の方法、紀行、日記、書翰、記事、叙事、論説、用語の注意詩歌格言の解釋敷衍美辭法の一般等に及び、一々解説文例摸範文をかゝけ簡潔と懇切とを旨とし編述せられたるものにして高等女學校程度の教科書には適切の良書なり

女子高等師範學校教諭西島富壽先生
女子高等師範學校教諭吉村千麿先生 共編

小學裁縫教程

文部省檢定濟

尋常兒童用定價九錢郵税二錢高等兒童用定價二十八錢郵税四錢
尋常教員用定價廿五錢郵税四錢高等教員用定價五十錢郵税八錢

此書は編者多年職を女子高等師範學校に奉じ實地に經驗したる結果に基きて新小學令に依りて編纂せられたり漫然舊慣に拘泥して統一なき小學校裁縫科の教授改良上實に適良有益なるものにして兒童用は兒童筆寫の徒勞を省かんが爲め又教員用は此科教授の方法及注意を説明し又明細なる圖解を施せり特に卷尾に詳細なる教授細目を附錄として教授者の便に供せり

教授要項及教授例

女子高等師範學校附屬小學校編纂（再版）
全一冊 定價四十錢 郵税六錢

本書は小學校に於ける諸教科の教授方針を明確にして其統一を圖らんが爲めに今般女子高等師範學校附屬小學校に於て編纂せられたるものにして前半に於ては各教科に對する教授の要項を示し後半に於ては各教科につき種々の場合に於ける教授の實例を示したるものなり苟も小學校に教鞭を採るもの必ず一讀するを要す

發行所 東京神田駿河臺お茶の水角 電話本局二千九百九十九番 光融館

(婦人と子どもの第四卷第貳號)
(明治三十七年二月五日發行(毎月一回五日發行)

明治三十四年二月六日内務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

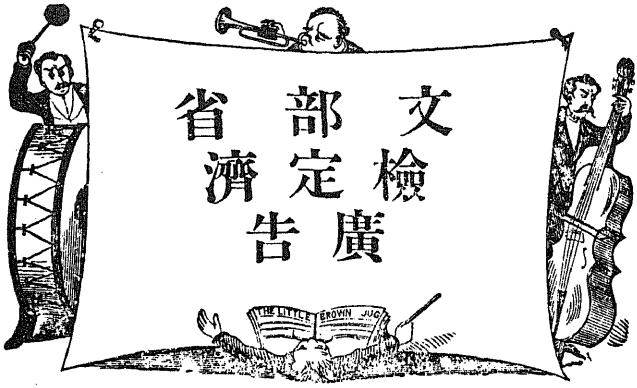
◎空前の唱歌良教科書!
◎檢定濟生徒用唱歌教科書の嚆矢
文部省檢定濟

唱歌教科書

郵税一册に就き金四錢

教師用 全四册
第一卷定價金三十錢
第二卷定價金三十錢
第三卷定價金三十錢
第四卷定價金三十五錢

生徒用 全四册
第一卷定價金十錢
第二卷定價金十五錢
第三卷定價金十錢
第四卷定價金十八錢



發行以來唯一の完全なる唱歌教科用書として非常なる大喝采を博し僅々數月間に三版發行の盛運に會し本書は今回其生徒用教師用共に文部省の檢定を經て更らに其眞價を發揮するの榮を得たり從來文部省檢定濟と世に刊行せる唱歌集は皆悉く教師用即ち教師の參考書として許可せられたるのみにして生徒用即ち眞の教科用書とし檢定を經たるものは實に本書の嚆矢たり以て本書か如何に該科の教授上最完全なる良書たるかを知るに足るべし

●洋琴 金參百圓以上 貳千圓迄 各種

●ヴァイオリン 鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

●樂隊用樂器 大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓半以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

●鼓隊用樂器 太鼓金貳拾圓以上 横笛金壹圓以上 ○學校用一組拾參圓

●手風琴 金貳圓五拾錢以上 參拾圓迄 各種

●保險附 山葉風琴 定價金拾六圓五拾錢以上金貳百圓迄

○右の外兩用風琴、吹奏琴、ハーモニカ、フラジョレット其他各樂器並に和洋音樂附屬品各種

●ピアノ、オルガン 調律修繕

●郵券貳錢御送附 目錄進呈

東京市京橋區竹川町十三番地 共益商社樂器店
(電信略號ヨキ)
(電話新橋五百廿九番)